

V 吹奏楽のためのスケルツォ 第2番《夏》／鹿野草平

課題曲Vに対しては、否定的ではありませんが、今まで積極的ではなかったと思います。でも、一昨年あたりから、設定された意図が理解出来るようになりました。音楽の持つ情感だけではなく、躍動感・運動性・ダンシングなどを、表現の核に持って来ようとする試みです。今年度のこの曲を見て、そのことが吹奏楽の1つの方向・カテゴリーとしての存在を、鮮明に受け止めることができました。確かに、この曲は吹奏楽に変化と活力を与えてくれるものです。およそ、音楽とは・吹奏楽とは、といった一つの世界の中だけで活動していることに対する、一つの課題を与えてくれた、といえます。日常の活動に、習慣的な閉塞感を感じているバンドの皆さんには、ぜひ演奏を試みて欲しいと思います。新しいイメージの発想に役立つと思います。

この曲は、音で作成されたアニメーションともいえます。1コマずつ積み重ねていく、動画の手法で作られているようです。手描きであれ、CGであれ、その積み重ねは動機を発展・展開させる、作曲の手法となんら違いはありません。自分の発想を楽譜にし、PCで演奏させる、といった初期DTMから、逆にPCで作成したDTMを人間で演奏しよう、という試みもわけです。誤解されては少々困りますが、例えばゲーム『太鼓の達人』はDTMの一つとも言えますが、それに人が挑戦するわけで、そこには1つの音楽表現としての、音楽性を充分に感じます。いわゆる“電波ソング”の存在もそうですし、DTMが、生演奏に充分活力を与えるシーンを創り出すことになって来たかな、と遅ればせながら思っているところです。

演奏に際しては、指示されているアーティキュレーション・強弱は、絶対的に記譜を忠実に再生(!)します。テンポは少し余裕を与えられていますが、その部分において、設定したテンポは絶対守ります。古典的アゴギクを駆使(?)したり、「歌って歌って」と大声を上げたり、しないで下さい。日頃、「お前とこのバンドは機械的な演奏だ」といわれているバンドは、その日頃が(良い意味であれば)生きて来ます。コンクールは別として、一度は演奏してみるべき曲です。音楽の考え、演奏というものの考えが、別にあるんだということが分かってくることでしょう。

【1】【2】

変拍子を駆使した、躍動感溢れる主題です。セクション・パートが一つの太い色彩ラインとなって、入り乱れ交代を繰り返しながら変拍子を疾走します。16分の5(3+2)を核にして、16分の4(記譜は8分の2)、5、6(記譜は8分の3)のパーツで組み立てられています。

The image shows a musical score for three staves. The top staff is in treble clef with a key signature of one flat. The time signature changes from 5/16 to 3/8, then back to 5/16, and finally to 3/8. The middle staff is also in treble clef with the same key signature and time signature changes. The bottom staff is in treble clef with a key signature of one flat and the same time signature changes. The music consists of rhythmic patterns of eighth and sixteenth notes.

旋律のハーモナイズは機能和使用しないので、1音に対する響きという感覚で作っています。この曲の場合、不協和音でなく、4和音（7thコード・6thコード）を使って、比較的ニュアンスのある響きが与えられています。ただ、機能和使用としての機能が発揮できないように、殆ど転回形を使っています。また、ハーモニーに対して、ベース音は意図的に不協和するFをペダル・ポイントに使って、ノンダイアトニックなポリコードを感じさせています。

臨時記号はその音のみ有効

【3】

第2部、コンテンポラリーなプログレッシブ・ロック的な基本リズム（ベース・ラインと Drums が作り出す・ブレイク・ビーツ・タイプの）にのったダンシングです。それぞれ、分かり易く書き直して見ます。

異なるリズム形を持つ3つのユニットを作り、木管群・ホルンが絡んでくる、といった形を取っています。

- ・ユニット1：Alto Sax. 1、Trumpet 1、Trombone 3
- ・ユニット2：Alto Sax. 2、Trumpet 2、Trombone 1、Euphonium（ポリコードの動きが見られる）
- ・ユニット3：Tenor Sax.、Trumpet 3、Trombone 2

それぞれのユニットの表現、ユニット間の対比的な表現は、指定されたアーティキュレーションは維持するとしても、表現法としての、古典的な手法や習慣的定石は全て排除すべきです。

【4】～【7】

第3部、変拍子に戻ります。モノクロ・線画のタッチの部分です。色彩感は無いのですが、そこには各部分の濃淡を見ることが出来ます。

【8】

第2部の冒頭部を覗かせて、【9】のTubaのモノローグに移ります。

【9】～【12】

第4部、Tubaのモノローグです。このソロは絶対Tubaであって欲しいです。このソロを語る事の出来るTuba奏者が見当たらなかったら、少くともこのシーンは、断念せざるをえません。中間部に置かれたこのTubaのモノローグは、シェークスピアの悲劇的クライマックスを演出する、“ハムレット”、“マクベス”、“リチャード3世”のモノローグが聞こえてきます。そこに風鈴が囁く。このドラマはまだ続くのだ。

【13】【14】

第5部、線と色彩を鮮明に分けられた部分です。16分の5（3+2、2+3が交互する）を核にした、第1部と同じ変拍子で進みます。色彩を与える和声は、3層構成のポリコードを形成します。3層という多重性は、音域が重ならないように、共通音を持たないように、和音を作ります。最低音（Bass）の倍音列の中から、高次倍音で和音を作って行くと、共鳴効果のある独特の響きが得られます。

【15】

【16】への導入部。

【16】【17】

拡大された【13】の線と色彩の描画は、より色彩感を加えます。最終、第6部の前半。拡大されたリズムが一瞬重なって、クライマックスを迎えます。

【18】【19】

16分の4、16分の5のプログレ・ロックのDrumsに乗って、完璧に色分けされたユニットが競演し、クライマックスを形作ります。圧倒的響宴です。

【20】

ジャズのフォームを思わず、Drums ソロです。Senza Misura（拍子、拍節をなくして）と指定されて、フリーの Drums ソロが期待されていますが、与えられた譜面では、拍子感があります。

【21】

このアニメーションのラスト・シーンでしょうか。何が起こり、何が終わったのか、演奏者が楽しめる、納得できる部分です。ここで、満足感を持つのか、単にほっとするだけか、もうカンベンして下さいって言うのか、その辺り本音が出て来ます。

【22】

エンディング。お疲れさま。作曲者の仕掛けに、キッチリはまりましたか。ここは、やはり何があっても、逆にこちらからはまり込む余裕が欲しいです。何せ、気持ちの整理だけは出来るはずです。もやもやがなくなるはずです。日頃なんだかんだといってくる、指揮者・先生の顔も、いつもと違うはずです。……で、落着。

来年度からは、課題曲 V への応募が俄然増えるのでは、という期待感を持っています。作曲者の意図された吹奏楽への活力に、より推進力が加増されることを願っています。比較するのも何ですが、オーケストラのスコアを移し替えただけの編曲(?)のものより、ずっとずっと興奮してきます。

●1つの練習法●

第1部であれば、同じパートの1・2・3のいずれかのパートを取り上げて、全員で演奏します。完璧に出来たところで、1・2・3各パートに別れてパート練習に移ります。これを各パートで行い、全合奏に移ります。各パートが完全に演奏できるまで、全合奏に入ってはいけません。最も注意しなければいけないことは、言うまでもなくテンポを守ることです。

第2部であれば、各ユニットで同じことをやります。

第3部は、【8】の3小節前までは、参加する全員が集まって2声部に別れ、上声・下声の2つのユニットとして、2つの大きい線を作ります。【18】からは、PCでの打ち込み(Drums)音を、メトロノーム代わりにすると良いと思います。

2010年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲分析

課題曲の中の課題 2010

監修・著作：櫛田 肤之扶

編集・制作：株式会社ウインズスコア

配布・公開日：2010年6月1日

楽譜引用元：

広瀬正憲・高橋宏樹・長野雄行・田嶋勉・鹿野草平

『2010年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』全日本吹奏楽連盟、2010年2月1日発行

※本書の著作権保有者は、著作者である櫛田 肤之扶であり、櫛田 肤之扶の協力・許諾のもと、(株)ウインズスコアが本書を制作・配布・公開しております。

※本書に掲載されている楽譜の一部は、『2010年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』からの引用であり、全日本吹奏楽コンクール課題曲の権利は、(社)全日本吹奏楽連盟に帰属します。

※本書の配布・コピー等の利用については、本書の内容・目的を理解した上で、金銭の受け渡しが発生しない場合に限り許可いたします。

※本書を使用するの、第三者との紛争・トラブルが発生した場合、著作者・制作者、及び(社)全日本吹奏楽連盟は一切責任を負いません。